

### 1. 参考文献

- ・黒田晁生、『入門金融』第三版、東洋経済新報社、2002年（第8章）
- ・各証券取引所のホームページ（<http://www.tse.or.jp/> など）

### 2. 各種の証券取引所

- ・東京証券取引所（6/8日現在：一部1,560社、二部575社、マザーズ90社、外国株30社）  
かつては会員組織の法人 01年11月以降、株式会社に变更（大阪は01年4月に株式会社）
- ・大阪証券取引所（5/28日現在：一部701社、二部310社、ヘラクレス103社）：本年4月1日上場
- ・名古屋証券取引所（6/7日現在：一部280社、二部131社、セントラル3社：＜単独上場は計93社＞）
- ・福岡証券取引所（6/1日現在：164社＜単独上場は34社＞）
- ・札幌証券取引所（6/8日現在HPの一覧掲載社数：102社+アンビシャス市場2社：＜単独上場は14社＞）  
かつては京都（01年3月、大阪に吸収）、広島・新潟（00年3月、東京に吸収）にも証券取引所
- ・店頭市場（921銘柄）市場開設と管理監督は日本証券業協会が、市場運営は(株)ジャスタックが担当
- ・各証券取引所が**上場基準**を策定：新興企業向けに緩やかな基準とした市場もみられる

### 3. 発行市場とその機能

- ・増資で資本金を増加させる 多様な方法（資金を調達できない無償増資、株式配当という方法も）  
有償発行には、株主割当、第三者割当、公募（額面発行 or 時価発行 or 中間発行）がある
- ・有償発行の場合、おカネは「株式購入者 増資した企業」に流れる：資金を調達できる
- ・資本市場から調達した資金のコストは？：少なくとも、配当は必要な筈・・・  
企業財務の理論で、「資本調達も借入金も変わらない」という説（M-M理論）もみられる

### 4. 流通市場

- ・市場で取引がある限り、いつでも売却することが可能（通常は、発行企業との資金授受はない）
- ・株式の価格の決め方：将来の配当の割引現在価値の合計という考え方もある（配当割引モデル）  
価格の計算にあたり、配当の成長率やリスク・プレミアムの想定次第で大きく違ってくる
- ・株価指数（日経225やTOPIXなどが有名）と「株式時価総額」
- ・「始値、高値、安値、終値」の4本足：株価指数にも個別銘柄にも存在、ローソク足の図も

### 5. 転換社債

- ・株式に転換することができる社債：事前に決められた転換価格で株式に変えることが可能（転換後、発行企業の資本金）・・・通常の社債よりも安い金利となる バブルの頃に大量発行
- ・株価の上昇期待がある場合などには、発行しやすい：転換価格の設定が重要なポイント  
社債と株式オプション（後述）の組み合わせとみなすことも可能

### 6. 株式投資信託

- ・複数の株式を組み入れた「投資信託」という商品も：多数の株を組込むことでリスクを下げる  
公社債のみの「公社債投資信託」、「株式投資信託」、両方を組み入れた投資信託など多様

以上